

謎に満ちた事件の発端と顛末

松の廊下での刃傷

四十七名の赤穂浪士が両国の吉良邸に討ち入ったのは、元禄十五年（一七〇二）十二月十四日の未明ことだった。夜になつて降りはじめた雪が、屋根や通りを白く覆いつくしていた。闇いは二時間あまりで終わり、吉良上野介の首級をあげた浪士たちは、主君が葬られている高輪泉岳寺まで、意氣揚々と引き上げていった。この出来事は、たちまち江戸中に広がり、まれに見る快挙として、第五代將軍・徳川綱吉の「生類憐れみの令」などで苦しんでいた江戸庶民の喝采を受けることになった。すでに人口に膾炙かじしした話だが、幾つかある仇討ちのなかで最も知られ、かつ日本人が喝采してやまない、仇討ち事件の一つといえよう。

この事件の発端は、前年の元禄十四年（一七〇二）三月十四日におきた。映画やドラマ、芝居などでも知られる江戸城本丸大廊下（松の廊下）での刃傷沙汰である。立ち話をしていた吉良上野介義央（よしおさ）（とも）に、浅野内匠頭長矩（ながのり）が、「この間の遺恨覚えたるか」と叫びながら、脇差しで背後から斬りかかったのである。内匠頭は、その場で旗本の梶川頼照（かじかわよりてる）に取り抑えられ、上野介は背中と額を切られたが致命傷とはならず、命を落とすことはなかつた。

